

裏返し『竹取物語』

― 一葉『十三夜』偶感 ―

永吉雅夫

夫の冷遇に思い余って離縁を訴えるためにあわただしく実家へ戻ってみると、「今宵は旧暦の十三夜、旧弊なれどお月見の真似事に団子をこしらへてお月様にお備へ申せし」、お関は母親のこんな言葉に迎えられるのである。作品の冒頭部分で父の斎藤主計が、戸口に立ったのがお関であることに気づいて招じられるときに「ずっとお月様のさす方へ」と言うのも、無論、この夜ならではの挨拶だったわけである。そもそも書き出しの「例は」という言葉からして、習慣化された日常に対する「今宵」の異例さを強調しており、樋口一葉の『十三夜』については「旧暦の「十三夜」という題名と、その一夜の出来事という設定は、いくつもの象徴作用を作品世界に投げかけている」とされるのだが、この夜は、では、なぜ九月十三夜なのだろう。あるいは九月十三夜であることは、

テキストをどのような読みの可能性に対して開いているのだろうか。

いまは原田勇という奏任官の「奥様」となった娘に対して「里方が此様な身柄では」と母親が卑下する言葉のなかに、今夜のお月様へのお供えを届けてはやりたかったが「十五夜にあげなんだから片月見に成っても悪るし」という言葉が見える。忌み事としての「片月見」とは、この九月十三夜を八月「十五夜」と一対と見るところに生まれるタブーである。十五夜を芋名月と呼ぶのに対して、栗名月とも豆名月とも呼ばれる十三夜。たとえば『守貞漫稿』「八月十五夜、賞月俗ニ月見ト云」の条には、「江戸ノ俗、今日若他ニ行テ酒食ヲ饗サルルカ、或ハ宿スコアレバ必ラス九月十三日ニモ再行テ今日ノ如ク宿スカ、或ハ酒食ヲ饗サルルコトスル人アリ、不為之ヲ片月見ト云テ忌ムコトトス、俗諺ノ甚シキ也、片付身ト云コトヲ忌ナルベシ、此故ニ大略今日ハ他家ニ宿ラザルコトトス」とある。「片付身」が何を意味するのか、多少あいまいではあるが、それが嫁に行く、嫁ぐという意味であるならば、さきの母親の言葉は、おそらくは無意識のうちにこのタブーの原義でもって物語の展開を照射

するのかもしれない。なぜなら、『十三夜』とは身分「不相応の縁につながれ」た女性の悲劇でもあるからだ。そして八月十五夜には「他家ニ宿ラザルコトス」るならば、お関が原田と住まう駿河台の家を捨てて上野新坂下の実家に帰ってくる名月の夜は、九月十三夜の方であるだろう。いささかほしいまま先走りをしてしまったが、要するに十三夜が背後に十五夜をひかえていることを確認できればよい。

そして八月十五夜の物語としてすぐに思い浮かぶのは、『竹取物語』である。いま論点の便宜にしたがって要約してみれば、それは次のような話であった。五人の貴公子の求婚譚につづいて、帝の求婚がある(①)。しかし、かぐや姫はそれをも辞退する(②)。やがて年あらたまつての春ごろから、かぐや姫は月を眺めては泣くようになり、竹取りの翁は月見を制する(③)。八月十五夜(④)、月の都から迎える天人がやってきて(⑤)、帝をはじめとする人々の抵抗も及ばず、かぐや姫は昇天する(⑥)。残された翁と姫、そして帝の悲嘆(⑦)。

さて『十三夜』は、正確には二幕構成になっているその(上)の部分、この①と⑦すなわち起結において一

致し、その②から⑥にいたる過程においては表裏の、というか対蹠的な関係にある物語としてとらえることができるようである。

①すなわち原田勇の求婚がある。それは、この作品では原田は「奏任官」であることによって意味付けられ強調されているように、「お位の宜い」「御身分のある」人からの求婚という点で、たんなる貴公子を超える帝の求婚に、同じ意味をあたえ得よう。

②お関は両親のすすめるままにはあれ、いわゆる玉の輿としての原田の求婚をなんにせよ承諾する。かぐや姫はその求婚に対して、急に影のように姿を消してしまったり、「むぐらはふ下にも年は経ぬる身のなにかは玉のうてなをも見む」という歌を返して拒絶したのであったが。

③『十三夜』においては、すくなくともお関の実家斎藤家では、月見は決してタブー視されていないし、忘れられた行事でもなく、むしろ積極的にその習慣がいつくしまれている。その姿勢は文明開化の世の中における旧儀廃頽の風潮のなかでは母親自身の言葉に見られるように「旧弊」に属しようが、そのような伝統的行事の保持はそれを核に結束する家族共同体の絆をお関に実感的に思い起させるべく、「お前が口に出さんとても親も察し

る弟も察しる、涙は各自に分て泣かうぞ」、お関を説得する主計の論理に正確に見合っている。きつと開化の体现者「奏任官」原田の家でこそ月見は顧みられることなく、お関はあるいは「今宵」が十三夜であることを意識していなかったかもしれない。

④⑤後の名月である九月十三夜、お関は「例」に似ず、「黒ぬり車」に送られることもなく、突然たったひとりやうてきて、迎えるものもなく、帰って行く。

⑥そして、それはお関の運動の軌跡としては駿河台から上野新坂下へ降下することになるが、その点かぐや姫の昇天と方向を異にする一方、いずれもが里帰りであるという点では軌を一にするものである。そもそも「ほんに御門の前を通る事はあるとも（中略）見す見すお二階の簾を見ながら、呼お関は何をして居る事かと思ひやるばかり行過ぎて仕舞まする」という母親の言葉は、お関を見る両親の見上げる視線をよく象徴しているが、今宵十三夜の月を見上げながらの彼らの話題はまさに子供自慢にはかならなかった。月に向かいもはや自分たちの手の届かない世界へいつてしまった娘をなつかしむかのような、そんな両親の視線の中をお関は降りてくるのである。十五夜の昇天に対する十三夜の降下は、しかしとも

に帰還なのである。

そこでねじれは、ひとめぐりする。⑦前掲の主計のお関説得の論理が「一つは親の為弟の為、太郎といふ子もあるものを」と、問題を実際にはなんら解決することなく、むしろお関を、それ故に苦しめられてきた関係性の論理のなかに引き戻し、したがって主計は「今宵限り関はなくなつて魂一つが彼の子の身を守るのと思ひますれば」という痛ましい言葉でしか報われないとき、その無力感と悲嘆は言うまでもあるまい。

これにつづく（下）は、幼なじみの恋人高坂録之助との思いがけない再会である。そんな設定はむろん『竹取物語』に求められようはずもない。強いて対照を求めるとすれば、やはりかぐや姫とそれなりに心を通いあわせていた帝の存在ということになるだろうか。姫を失って、「あふこともなみだにうかぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ」と歌詠む帝が、最終的に「権力も富も、そして「不死の薬」も、失われた愛にくらべれば、はかないもの」で、「宿世に克てない人間の代表として描かれてゐる」のであれば、スケールこそちがえ商家のひとり息子として持てるものと関係のすべてをなげうった録之助

に「失われた愛」の悲惨と眞実を見ることが出来るからである。このできすぎた出会い、しかし、お閨が引き籠もることを余儀なくされた関係性の論理をお閨を（結果的な）強者とする関係に照らすことによって「憂きはお互ひの世」、関係本来の相互性へと拡げ、その相互性の保証を「今宵」の「月」に負託することで、月を見上げる十五夜の物語を月が見下ろす十三夜の物語へと転換しているのである。

註

- (1) 樋口一葉「十三夜」を読む（十川信介ほか）、岩波書店『文学』季刊第一卷第一・二号
- (2) 前田勇編『江戸語の辞典』
- (3) 小学館日本古典文学全集8『竹取物語（ほか）』片桐洋一 一〇八頁頭注

（一九九一年七月一〇日）